

個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実に関する研究

令和の学びプロジェクトチーム

研究の概要

令和3年1月、文部科学省中央教育審議会答申「『令和の日本型学校教育』の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～（答申）」が取りまとめられた。また、GIGAスクール構想のもと、静岡県内の各学校においても1人1台端末の整備が進められた。各学校には、学習指導要領の着実な実施に向け、個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実が求められている。

本研究は、令和4年度から令和6年度までの3年間、静岡県総合教育センターの各課・班を横断した全所体制で、「個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実」に関して研究したものである。

本研究では、「個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実」を資質・能力の育成につながる「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善との関係の中でどのように捉えるか、また、「個別最適な学び」と「協働的な学び」を実践する上でのポイントや、それにより期待される授業への効果について検証することを目的とした。そのために、文献調査、事例収集、研究協力校における研究に取り組んだ。

本研究成果については、リーフレットや説明動画を作成し、定期訪問や研修等での紹介を通じて、学校に還元するものとする。

キーワード：個別最適な学び、協働的な学び、個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実、主体的・対話的で深い学び、資質・能力の育成、ICT活用

目 次

I	主題設定の理由（研究の背景・目的）	1
1	研究の背景	1
2	研究の目的	1
II	研究の方法	1
1	令和4年度	1
(1)	研究の目標	1
(2)	研究の進め方	2
2	令和5年度以降	2
(1)	研究の目標	2
(2)	研究の進め方	2
ア	研究協力校	2
イ	検証方法	3
III	研究の内容	4
1	令和4年度	4
(1)	実施内容	4
ア	用語の整理	4
イ	「個別最適な学び」と「協働的な学び」とは	6
(2)	結果	7
2	令和5年度	7
(1)	実施内容	7
(2)	結果	8
ア	公開授業	8
イ	質問紙調査	8
ウ	R5リーフレット	9
エ	分析と考察	10
3	令和6年度	10
(1)	実施内容	10
ア	研究協力校全体	10
イ	3人の授業者との研究	10
(2)	結果	11
ア	7月意見交換会	11
イ	9月研究授業	11
ウ	9月意見交換会とフィードバック	13
エ	11月研究授業	14
オ	11月意見交換会とフィードバック	17

カ 質問紙調査	18
(3) 分析と考察	19
ア 個別最適な学びと協働的な学びのポイント	19
イ 個別最適な学びと協働的な学びの学習効果	21
ウ 個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実	21
エ 質問紙調査	22
IV 研究のまとめ	22
1 研究の成果と課題	22
2 今後の展望	24
【主な参考文献】(著者名 50 音順)	25
【研究組織】	25

個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実に関する研究

令和の学びプロジェクトチーム

I 主題設定の理由（研究の背景・目的）

1 研究の背景

平成29年3月に告示された学習指導要領は、令和2年度以降、各校種で実施年度を迎えた（高等学校は令和4年度から年次進行）。その中で、令和3年1月26日に中央教育審議会から『令和の日本型学校教育』の構築を目指して～全ての子供達の可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～（答申）」（以下、「答申」と言う。）が示され、続いて文部科学省初等中等教育局教育課程課より、「学習指導要領の趣旨の実現に向けた個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実に関する参考資料（令和3年3月版）」（以下、「参考資料」と言う。）が発表された。これらの資料において、実現すべき「令和の日本型学校教育」の姿として、「個別最適な学び」と「協働的な学び」という新たな教育キーワードと、改めて子どもの学びにICTを活用する必要性が示された。また、GIGAスクール構想により、静岡県内の各学校においても1人1台端末の整備が進められる中、新型コロナウイルス感染症の流行という特殊な状況下で、その必要性から加速度的に整備が進んだ。

静岡県総合教育センター（以下、「センター」と言う。）は、学習指導要領改訂の要点の一つである「主体的・対話的で深い学び」の実現に向け、「アクティブ・ラーニングプロジェクトチーム（通称：ALPT）」を組織し、各課・班を横断した全所体制で、校種に応じた研修の実施、研究報告資料や研修支援冊子の作成等に取り組んできた。

このような中、ALPTの流れを汲む、各課・班を横断した全所体制である「令和の学びプロジェクトチーム（通称：RPT）」が組織され、「校種をつないだ資質・能力の育成」に主眼を置いた研修チームと、「個別最適な学び」と「協働的な学び」が学習指導要領の着実な実施につながるよう研究を主眼とする研究チームが編成された。本稿は、この研究チームにおける、令和4年度から令和6年度までの3年間の取組を整理する。

2 研究の目的

『令和の日本型学校教育』の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～（答申）」の内容を踏まえ、学習指導要領の着実な実施を図り、生涯にわたって自律的に学び、自己を高める、多様な人材を育成するための学校教育の在り方を追究する。

II 研究の方法

1 令和4年度

(1) 研究の目標

研究の目的を達成するために、表1のように目標を立てた。令和4年度は表1の①を目標とした。

表 1 研究の具体的な目標

-
- ① 資質・能力の育成につながる、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善と、「個別最適な学び」と「協働的な学び」及びICT活用の関係性を整理する。
 - ② 「個別最適な学び」に向けた授業の工夫やICT活用と、それによる児童生徒の学びへの効果について、知見を蓄積する。
 - ③ 「協働的な学び」に向けた授業の工夫やICT活用と、それによる児童生徒の学びへの効果について、知見を蓄積する。
 - ④ 「個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実」について、「個別最適な学び」と「協働的な学び」の関係性を整理し、一体的に充実するための工夫などについて知見を蓄積する。
 - ⑤ 「個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実」を意識した授業による、児童生徒の資質・能力の育成につながる「主体的・対話的で深い学び」を目指した授業改善への効果について、知見を蓄積する。
-

(2) 研究の進め方

答申と参考資料を読み、児童生徒の資質・能力の育成につながる、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善と、「個別最適な学び」と「協働的な学び」及びICT活用の関係性を整理した。また、得られた成果を県内学校に還元できるよう、リーフレットを作成した。

2 令和5年度以降

(1) 研究の目標

研究の目的を達成するために、令和4年度の研究成果をもとに、令和5年度以降は、表1の②～⑤を目標とした。

(2) 研究の進め方

前年度までに得た成果を基に、研究協力校で「個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実」とそれに向けたICT活用の重要性について校内研修会などを通じて理解を深めたのち、「個別最適な学び」と「協働的な学び」を意識した授業実践を依頼した。この実践から「個別最適な学び」や「協働的な学び」について得られた知見をまとめるとともに、質問紙調査を用いて研究協力校の教員の考え方の研究前後の比較を行った。

ア 研究協力校

学校での授業実践を通して知見を得るため、県立遠江総合高等学校（以下、「研究協力校」と言う。）に研究協力を依頼した。研究協力を高等学校に依頼したのは、本研究が、全ての校種への研究成果の還元を目指しているためである。高等学校の教育は、小学校、中学校、特別支援学校の学びの上に成り立つものである。高等学校で得られた研究成果が高等学校以外の校種の教員に伝わることで、今行っている実践への理解が深まったり、価値を再認識したりすることが期待される。また、高等学校の学びを見据えて、今の児童生徒の学びの捉え直しが起こることも考えられる。さらに、高等学校では多様な学習内容が取り扱われているため、多様な教科の研究結果から、新たな気づきが得られることも期待できる。

研究協力校のグラデュエーション・ポリシーの一つに、『『自立した、さわやかな高校生』として地域に期待され、地域社会に積極的に参画し、その発展に貢献できる生徒』の育成が掲げられている。研究協力校における「自立」とは、「自ら考え、学び、行動」すること、「多様な相手の考えを理解したり自分の考えを伝えたり、多様な人々と協働」していくことである。「自立」した生徒を育成するために、各教科・科目における「探究的な学び」に重点を置いた授業改善を目指している。答申では、「個別最適

な学び」や「協働的な学び」によって「自立した学習者」の育成が目指されている。このことを踏まえ、本研究では、研究協力校における「探究的な学び」の実現に向けた実践は、「個別最適な学び」と「協働的な学び」を一体的に充実させ、「主体的・対話的で深い学び」を通した生徒の資質・能力の育成に資するものとする。また、研究協力校は総合学科であるため様々な科目が開設されており、在籍する生徒は、自分の将来を見通しながら、多様な科目から選択して学んでいる。生徒の進路も多様で、卒業後すぐに地域社会で活躍する生徒も多いため、学習の個性化で重視されるキャリア形成の意識も高い。このような点は、研究のねらいと一致する。

以上のことから、研究協力校に協力を依頼して研究を進めることに意義があると考えた。

イ 検証方法

(7) 授業実践から

「個別最適な学び」、「協働的な学び」が行われた授業は、令和4年度の研究成果を基に、生徒の学びに、次のいずれかの表れが見られる、もしくは、その表れが期待できるものとした。

○個別最適な学び

- ・同じ目標に向かって、多様な方法等で学習に取り組んでいる。
- ・それぞれの興味・関心に応じた課題に向かって、学習に取り組んでいる。
- ・学習の進め方や学習の方向性を考えるなど、自分にふさわしい学習方法を模索している。

○協働的な学び

- ・他者と協働し、多様な意見を基に自らの学習を深め、広げることができている。

(4) 質問紙調査

研究協力校の教員を対象に質問紙調査（表2、別紙1）を年2回実施し、研究成果を検証した。結果の分析は、令和5年度及び令和6年度ともに、研究前後の変化をMann-WhitneyのU検定で、2回目の結果をSpearmanの順位相関係数で分析した。また、令和6年度の12月のみ、表2に示す質問27と28を加えた。

表2 各質問項目の要点等

番号	質問の要点	質問の意図
1	個別最適な学び 指導の個別化	教員の児童・生徒の実態の把握
2	個別最適な学び 指導の個別化	教員の児童・生徒の実態の把握に基づいた、授業改善への意欲
3	個別最適な学び 指導の個別化	教員の児童・生徒の実態の把握に基づいた、授業改善への意欲
4	個別最適な学び 学習の個性化	生徒の個別最適な学びの成果
5	個別最適な学び 指導の個別化	生徒の個別最適な学びの成果
6	個別最適な学び 指導の個別化	生徒の個別最適な学びの成果
7	協働的な学び 対話と思考	生徒の授業集団内での協働的な学び
8	協働的な学び 対話と思考	生徒の学校内で授業集団を超えた協働的な学び
9	協働的な学び 対話と思考	生徒の学校を超えた協働的な学び
10	協働的な学び 深い学び	生徒の協働的な学びの成果
11	カリキュラム・マネジメント	教員のカリキュラム・マネジメントを意識した授業改善への取組
12	授業設計診断 解決したい課題や問い	教員の解決したい課題や問いを意識した授業改善への取組
13	授業設計診断 解決したい課題や問い	教員の解決したい課題や問いを意識した授業改善への取組
14	授業設計診断 考えるための材料	教員の考えるための材料を意識した授業改善への取組
15	授業設計診断 対話と思考	教員の対話と思考を意識した授業改善への取組
16	授業設計診断 学習の成果	教員の学習の成果を意識した授業改善への取組
17	カリキュラム・マネジメント	地域連携
18	ICT活用	教員のICT活用の必要性
19	ICT活用	教員のICT活用への意欲
20	ICT活用	教員のICT活用への意欲
23	ICT活用	教員のICT活用への意欲
24	ICT活用	教員のICT活用への意欲
25	ICT活用	教員のICT活用の成果
27	「個別最適な学び」と「協働的な学び」を意識した授業づくりを通じて、御自身の授業について変化や気付いたことがあれば記入してください。	
28	「個別最適な学び」と「協働的な学び」を意識した授業を通じて、生徒の変化について気付いたことがあれば記入してください。	

(ウ) 教員へのヒアリングと授業アンケート

令和6年度においては、研究授業の授業者へのヒアリングとその授業の生徒アンケート(表3)を行った。

表3 アンケート内容

番号	質問の内容
1	授業に取り組んで、考えが深まったと感じた場面を記入してください。
2	なぜ考えが深まったと感じることができたのか。その理由を記入してください。

III 研究の内容

1 令和4年度

(1) 実施内容

ア 用語の整理

参考資料では、「個別最適な学び」と「協働的な学び」について、次のように述べられている。

未来の社会を見据え、児童生徒の資質・能力を育成するに当たっては、このような学習指導要領の趣旨を踏まえ、「個別最適な学び」と「協働的な学び」という観点から学習活動の充実の方向性を改めて捉え直し、これまで培われてきた工夫とともに、ICTの新たな可能性を指導に生かすことで、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善につなげていくことが重要と考えられます。

これは、「個別最適な学び」と「協働的な学び」が、児童生徒の資質・能力を育成するための、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善につながる観点であることを示している。併せて、その際にICTを活用する重要性も示されている。

また、参考資料にはさらに次のような記述がある。

「個別最適な学び」の成果を「協働的な学び」に生かし、更にその成果を「個別最適な学び」に還元するなど、「個別最適な学び」と「協働的な学び」を一体的に充実していくことが大切です。

これは、「個別最適な学び」と「協働的な学び」が相乗的に学習成果を高めるものとして考えられており、だからこそ、「個別最適な学びと協働的な学びを一体的に充実」することに意味があることを示している。

答申では、次のような二つの記述が見られる。

子供がICTを日常的に活用することにより、自ら見通しを立てたり、学習の状況を把握し、新たな学習方法を見いだしたり、自ら学び直しや発展的な学習を行いやすくなったりする等の効果が生まれることが期待される。

ICTの活用により、子供一人一人が自分のペースを大事にしながら共同で作成・編集等を行う活動や、多様な意見を共有しつつ合意形成を図る活動など、「協働的な学び」もまた発展させることができる。

これらは、授業における児童生徒のICT活用が、「個別最適な学び」や「協働的な学び」の効果を高めたり発展させたりすることを示している。さらに、参考資料には次のような記述も見られる。

「個に応じた指導」に当たっては、「指導の個別化」と「学習の個性化」という二つの側面を踏まえるとともに、ICTの活用も含め、児童生徒が主体的に学習を進められるよう、それぞれの児童生徒が自分にふさわしい学習方法を模索するような態度を育てることが大切です。

このため、令和4年度に作成したリーフレット「児童生徒の資質・能力を育成する個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実に向けたICT活用」（以下、「R4リーフレット」と言う。）では、「資質・能力の育成」、「主体的・対話的で深い学び」、「個別最適な学び」、「協働的な学び」、「ICT活用」について、図1のように整理した。

特に本研究では、授業におけるICT活用を、「個別最適な学び」と「協働的な学び」の視点で捉えることを示した。文部科学省が示した「ICTを活用した指導方法」¹（以下、「ICT活用の指導方法」と言う。）の中でも、ICT活用の事例は一斉学習、個別学習、協働学習の3点で示されており、このICT活用の位置付けは適切なものであると考える。

¹ 平成30年に、文部科学省の生涯学習政策情報教育課から示された。

なお、図1（詳細は下の二次元コード参照）の「主体的・対話的で深い学び」の欄に示した授業設計診断の4項目²とは、ALPT研究における成果で、主体的・対話的で深い学びが生じやすい授業の要素を示したものである。

イ 「個別最適な学び」と「協働的な学び」とは

答申及び参考資料において、「個別最適な学び」は、「指導の個別化」と「学習の個性化」の二つに分けられている。参考資料では、それらについて次のように示している。



図1 個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実に関する全体像

○「指導の個別化」について

- ・全ての児童に基礎的・基本的な知識・技能を確実に習得させ、思考力・判断力・表現力等や、自ら学習を調整しながら粘り強く学習に取り組む態度等を育成するためには、教師が支援の必要な児童により重点的な指導を行うことなどで効果的な指導を実現することや、児童一人一人の特性や学習進度、学習到達度等に応じ、指導方法・教材や学習時間等の柔軟な提供・設定を行うことなどの「指導の個別化」が必要である。
- ・「指導の個別化」は一定の目標を全ての児童生徒が達成することを目指し、個々の児童生徒に応じて異なる方法等で学習を進めることであり、その中で児童生徒自身が自らの特徴やどのように学習を進めることが効果的であるかを学んでいくことなども含まれます。

○「学習の個性化」について

- ・基礎的・基本的な知識・技能等や、言語能力、情報活用能力、問題発見・解決能力等の学習の基盤となる資質・能力等を土台として、幼児期からの様々な場を通じての体験活動から得た児童の興味・関心・キャリア形成の方向性等に応じ、探究において課題の設定、情報の収集、整理・分析、まとめ・表現を行う等、教師が児童一人一人に応じた学習活動や学習課題に取り組む機会を提供することで、児童自身が学習が最適となるよう調整する「学習の個性化」も必要である。
- ・「学習の個性化」は個々の児童生徒の興味・関心等に応じた異なる目標に向けて、学習を深め、広げることを意味し、その中で児童生徒自身が自らどのような方向性で

² 「解決したい題や問い」「考えるための材料」「対話と思考」「学習の成果」

学習を進めていったら良いかを考えていくことなども含む。

「指導の個別化」は一定の目標を全ての児童生徒が達成することを目指し学習を進める点、「学習の個性化」は個々の児童生徒の興味・関心等に応じた異なる目標に向けて学習を進める点は、二つの違いを理解する上でのポイントとなる。また、「個別最適な学び」を通して、児童生徒が「自立した学習者」として、自らの学習が最適となるよう調整できるようになることを目指している点も重要である。

一方、「協働的な学び」については、参考資料に次のように示されている。

○「協働的な学び」

- ・ 探究的な学習や体験活動などを通じ、子供同士で、あるいは地域の方々をはじめ多様な他者と協働しながら、あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、様々な社会的な変化を乗り越え、持続可能な社会の創り手となることができるよう、必要な資質・能力を育成する「協働的な学び」を充実することも重要である。

これらから、児童生徒の学びを深めるためのポイントを、図2（詳細は下の二次元コード参照）のよう

(2) 結果

R4リーフレットでは、図1と図2に加え、図2のポイントに基づいて、ICTを活用して「個別最適な学び」と「協働的な学び」を一体的に充実させている、小学校・中学校・高等学校・特別支援学校の6つの授業実践事例を紹介した。また、全ての教員がICTを活用することができるように、ICT機器、授業支援アプリ、情報モラル・セキュリティーの3項目についての注意事項をまとめた。

個別最適な学び		協働的な学び
指導の個別化	学習の個性化	
(教師が) <input type="checkbox"/> 一人ひとりの児童生徒の特性や学習進度、学習到達度を把握している。 <input type="checkbox"/> 一人ひとりの児童生徒の特性や学習進度、学習到達度に応じ、指導方法・教材、学習時間の設定等を工夫している。 <input type="checkbox"/> 特別な支援が必要な児童生徒に、より重点的で効果的な指導を行っている。	(児童生徒が) <input type="checkbox"/> それぞれの興味・関心に応じた学習課題を設定し、目標を持って探究している。 <input type="checkbox"/> 自らの学習状況を把握し、新たな学習方法を見い出している。 <input type="checkbox"/> 自らの学習状況を把握し、発展的な学習を行っている。	(児童生徒が) <input type="checkbox"/> 児童生徒同士で協働してレポート、資料、作品などを制作している。 <input type="checkbox"/> 多様な他者（異学年、他校の児童生徒、地域の人々、専門家等）と交流している。 <input type="checkbox"/> 異なる感性や考え方を尊重し、多様な意見を基に自らの学習を深め、広げることができている。

どうしたら効果的にICTを活用できるだろう？

(児童生徒・教師が) ICTの特性や強みを生かして活用している。

図2 児童生徒の学びを深めるためのポイント



2 令和5年度

(1) 実施内容

研究協力校において、6月にR4リーフレットを用いて研究の内容を説明した。また、9月には、静岡大学教育学部の河崎美保准教授に依頼し、「探究的な学びの意義と学習環境」というテーマで講演会を開催した。これらを通して、研究協力校での「個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実」についての理解を深めた。

11月には、「個別最適な学び」と「協働的な学び」及び生徒がICTを活用して学習する場面を意識した授業実践を公開授業として行った。授業者は、授業実践前に公開授業の内容を示したシートを作成し、教員間で共有した。シートでは、本時のねらいを示すとともに、育成を目指す資質・能力、ICT活用、協働的な学び、探究的な学びについて明確にするものとした。

質問紙調査は、研究協力校の全教員に依頼し、7月と12月の2回行った。

また、研究協力校での研究以外にも、県内小・中学校の授業見学等を実施し、「個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実」とICT活用が実践されている事例を集めた。これらを基に、ICT活用の事例をより充実させた、令和5年度版リーフレット「児童生徒の資質・能力を育成する個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実に向けた効果的なICT活用」（以下、「R5リーフレット」と言う。）を作成した。

(2) 結果

ア 公開授業

公開授業では、地域人材を講師として招いた授業が行われ、生徒と外部人材が協働的に学ぶ姿が見られた。参考資料では、「協働的な学び」について、学校内のみならず地域の人など多様な他者と協働することの重要性が示されており、地域人材を講師として招いたこの学習活動により、生徒の学びの広がりが期待できる。また、理科の授業では、生徒がICTを活用して実験の予測を共有したり結果を分析したりする姿、生徒自らが課題を設定して探究する姿等が見られた。さらに、生徒自らが課題を設定して探究する授業では、学習を自分事にしながら、生徒が自分の課題に対して主体的に取り組む姿が見られた。このように、それぞれの授業で、「個別最適な学び」と「協働的な学び」及びICTの活用を取り入れた授業が見られた。

イ 質問紙調査

各質問項目について、7月と12月を比較したところ、有意差は認められなかった。12月の結果について分析をすると、質問5及び質問11について、質問12～15との間に中程度の相関が見られた（表4、質問内容は表5）。

質問5は「個別最適な学び」に関わる内容で、生徒の学びの姿を表す。一方、質問11はカリキュラム・マネジメントに関わる内容、質問12、13、14、15はいずれもALPTの成果である授業設計診断の4

表4 12月質問紙調査の分析結果1 (n=42)

	質問12	質問13	質問14	質問15
質問5	0.508**	0.518**	0.519**	0.555**
質問11	0.722**	0.677**	0.670**	0.615**

項目に関わる内容で、教員の授業設計に関する意識を表す。質問5と質問12～15の相関関係から、生徒の「個別最適な学び」の姿と、教員の授業設計診断の4項目への意識との関係性が示された。このため、授業設計診断の4項目を意識することは、授業を「主体的・対話的で深い学び」にしようとする教員の意識の表れともいえる。

また、質問11と質問12～15の相関関係から、教員のカリキュラム・マネジメントへの意識と授業設計診断の4項目への意識には、関係性が高いことが示された。

表5 分析結果1で相関関係の見られた質問内容

質問5	生徒が、仮説を立て、見通しをもって学習している。
質問11	自校で育成を目指す生徒像を踏まえて授業設計を行っている。
質問12	授業設計において、児童生徒が解決したくなるような課題（問い）を設定している。
質問13	授業設計において、他者との対話が必要な課題（問い）を設定している。
質問14	授業設計において、複数の視点や立場から考え、比較、統合することで解決策や答えにつながるよう、考えるための材料（資料等）を工夫している。
質問15	授業設計において、教科・科目の「見方・考え方」を働かせて、児童生徒が思考できるように工夫している。

続いて、「ICTの活用」に関わる質問に注目して分析を行った（表6、質問内容は表7）。質問18と質問25の間に中程度以上の相関が見られたことから、ICTの活用について「必要感」をもつことや「効果を実感」できることが、活用の機会の増加につながるということが推測される。さらに、質問25は、質問23、24と高い相関が見られたことから、単元（題材）を見通してICTの

表6 12月質問紙調査の分析結果2 (n=42)

	質問19	質問20	質問23	質問24	質問25
活用場面を想定すること、生徒に身に付けさせたい資質・能力を意識してICTの活用場面を取り入れていくことが、効果的なICT活用につながると考えられる。	0.603**	0.719**	0.504**	0.452**	0.650**
	0.571**	0.599**	0.761**	0.750**	—

活用場面を想定すること、生徒に身に付けさせたい資質・能力を意識してICTの活用場面を取り入れていくことが、効果的なICT活用につながると考えられる。

表7 分析結果2で相関関係の見られた質問内容

質問18	授業でICTを活用する必要性を感じている。
質問19	ICTの活用方法や成果を同僚と共有している。
質問20	授業で生徒がICTを活用する機会を設けている。
質問23	ICTを生徒が活用する場面を想定して単元（題材）の計画を立てている。
質問24	生徒に身に付けさせたい資質・能力を意識してICTを活用する場面や方法を工夫している。
質問25	授業におけるICT活用の効果を実感している。

ウ R5リーフレット

ICTを効果的に活用し、「個別最適な学び」と「協働的な学び」が行われた授業の事例を集め、R5リーフレットにまとめた（図3：詳細は下の二次元コード参照）。事例は、小学校、中学校、高等学校、特別支援学校についてそれぞれ2事例ずつ収集した。

「個別最適な学び」におけるICT活用には、自分の意見や考えをまとめる活動における活用、個人やグループなど状況に応じて学びの環境を変えるための活用、情報を収集する活用に加え、特別支援教育の視点で同じ学習活動に参加するためにそれぞれの特性を補う活用などの事例があった。

ICTの情報蓄積機能³により、児童生徒が試行錯誤しやすくなったり、意見を修正しやすくなったり、多様な学びのための材料にアクセスできたりする等の効果が見られた。また、「協働的な学び」におけるICT活用には、それぞれが調べたり実験したりした成果を共有する活用の事例があった。ICTの情報共有機能⁴により、児童生徒の考えが広がりやすくなる等の効果が見られた。さら

に、個人で1人1台端末を活用して試行錯誤してまとめたことをグループで共有する中で、それぞれの児童生徒に新たな気づきが生まれることや、特別支援教育の視点でそれぞれの特性をICTを活用して補いながら協働的に学ぶ事例も紹介され

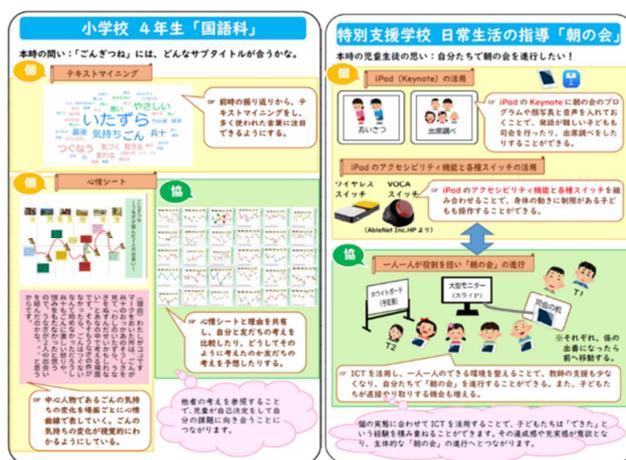


図3 ICT活用の事例



³ 静岡県総合教育センター 高等学校 ICT活用の参考資料 Volume 2 令和6年5月版より

⁴ 注釈³と同様

ていた。個人で試行錯誤してまとめることやそれぞれの特性をICTを活用して補うことは「個別最適な学び」に当たる。これらの事例から、ICTの活用により「個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実」が促進することがうかがえた。

エ 分析と考察

公開授業やR5リーフレットから、「個別最適な学び」と「協働的な学び」及びICT活用について事例や関係性を見いだすことができ、一定の成果があった。

質問紙調査では、7月と12月の結果に有意差が認められた質問項目はなかった。次年度には「個別最適な学び」と「協働的な学び」の理解がより深まるよう、研究協力校にさらに丁寧な説明が必要であると考えた。質問紙調査の質問間の関係性からは、教員が「主体的・対話的で深い学び」を意識して授業展開を考えることと、生徒に「個別最適な学び」が生じることの関係性が見られたため、「個別最適な学び」の授業展開を考える上で、授業設計診断の4項目や「学びのデザインシート⁵」が活用できる可能性が示唆された。

ICT活用については、研究協力校としても課題意識を持ち、推進していきたいテーマであった。質問紙調査からは、ICTの活用について必要感や効果実感が、活用の推進につながることを示唆されたので、ICT活用の指導方法にある、個別学習と協働学習におけるICT活用について紹介し、ICT活用の糸口を伝えていくことも必要であると考えた。

3 令和6年度

(1) 実施内容

ア 研究協力校全体

研究協力校において、6月に「個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実」について理解を深めるために、校内研修会を行った。ここでは、「個別最適な学び」と「協働的な学び」について答申などから得られた知見を確認したのち、「個別最適な学び」と「協働的な学び」及びそのICT活用について、R5リーフレットやICTを活用した指導方法を用いて、具体的に説明した。

学校訪問時には授業を見学し、「個別最適な学び」と「協働的な学び」の視点から気付いた点や、次に説明する3人の授業者の実践から得られたことを、フィードバックした。

質問紙調査は、研究協力校の全教員に依頼し、7月と12月の2回行った。

イ 3人の授業者との研究

地歴公民科・公民科（以下、「地歴公民科」と言う。）、数学科、商業科の3人の授業者に対する「個別最適な学び」と「協働的な学び」を意識した授業づくりの支援を通じて研究を深めた。授業者には、研究授業を年2回行うことを依頼し、センターは授業づくりのサポートと研究授業後に生徒のアンケートなどを基にしたフィードバックを行うこととした。授業後のフィードバックでは、研究顧問である河崎准教授にも指導を依頼した。研究授業の学習指導案は、授業者のねらいや、授業計画における「個別最適な学び」と「協働的な学び」をねらった学習活動が明確になり、授業のポイン

⁵ センターが開発した、授業設計診断の4項目を意識して授業を設計するためのシート。

トを共有できるものとした。また、「協働的な学び」の後には、必ず個別学習の時間を設け、最後に「個別最適な学び」が期待できるような授業展開についても依頼した。さらに、授業づくりを始める前に、3人の授業者とセンター指導主事で、「個別最適な学び」と「協働的な学び」について意見交換会を行い、意義や目的を確認した。

(2) 結果

ア 7月意見交換会

7月に行った意見交換会では、小学校・中学校・特別支援学校での異なる校種の実践事例を交えた意見交換を行い、3人の授業者とともに「個別最適な学び」と「協働的な学び」の理解を深めることができた。3人の授業者は、高等学校でも生徒一人一人の学習進度や意欲には差があり、一斉授業で伝えるだけでは限界があることと、それを補う個別指導の重要性を認識していた。その上で、授業者の説明時間を減らし、生徒に学習時間を委ねながら個別の支援を充実させること、生徒に学習課題や教材などを選ばせることなどに組みたいとの意見が出た。さらに、個別最適に学ぶ中で、生徒個人ではうまく学習目標に到達できないときに、「協働的な学び」の活用が期待でき、「個別最適な学び」と「協働的な学び」をセットとして捉え、挑戦してみたいとの声も挙がった。

イ 9月研究授業

(7) 商業科の研究授業（簿記）

売上原価の算定を取り扱った授業であった。授業者は、売上原価の計算の仕方を覚えるのではなく、売上原価の仕組みを理解することを通して、知識及び技術を習得することをねらいとした。授業のポイントとして、個別最適な学びを重視し、通常、売上原価を算出する際に用いられるBox図に加えて、数直線、立式し計算の三つの方法を生徒に提示し、



図4 グループ学習の様子

自由に選ばせて授業を進めた。また、授業はグループ学習を中心に進め（図4）、「協働的な学び」も重視していた。生徒アンケートの回答（表8）から、生徒が三つの方法を自分で選び、試行錯誤しながら売上原価を算出している姿が見られた。これにより、自分に合った学習方法に気付くこと等も期待され、「個別最適な学び」の中で、生徒の自らの学習を調整する力が育成されたことが推測される。また、いろいろな考え方を共有したり、他者の意見を元に自分の考えを深めたりする姿も見られ、「協働的な学び」が生徒の学びを深めたことが推測される。生徒の回答から、「協働的な学び」が自分の学びに有効であると感じた様子も見られた。なお、図や数直線などは、生徒に1人1台端末を通じて提供されていた。（図5）



図5 ICT活用の様子

表8 9月商業科研究授業の生徒アンケートの回答（抜粋）

1. 授業に取り組んで、考えが深まったと感じた場面を記入してください。
<ul style="list-style-type: none"> ・自分で式を求めて取り組んだこと。 ・Box図を使ってやったこと。 ・先生が解説してくれたこと。 ・1人1台端末を用いたこと。 ・グループで考えたこと。 ・グループで話し合ったこと。 ・グループで違う意見を聞いたとき。
2. なぜ考えが深まったと感じることができたのか。その理由を記入してください。
<ul style="list-style-type: none"> ・答えを聞く前に導き出せたから。 ・図の有無で理解のしやすさが変わったから。 ・仲間の意見を取り入れることで、より自分の意見の内容が良くなったから。 ・自分では気付けなかったところを共有して気付くことができたから。 ・まわりの人と話して実際に体験しながら行う中で、考えが深まったから。 ・グループの人が反応してくれて自信がついたから。

(イ) 数学科の研究授業（数学A）

サイコロを用いた確率の事象を取り扱った授業であった。授業の目標は、「サイコロの数を変化させながら、確率の求め方を考えることができる。」であり、思考力、判断力、表現力等の育成を意識していた。授業者は、生徒が実際にサイコロを用いる中で、確率の考え方を身に付けてもらうことをねらいとした。授業のポイントとして、生徒がサイコロを用いてそれぞれで最適な実験を行い試行錯誤できるよう、サイコロの個数を変えて考える必要のある課題を設定した。生徒がより興味をひきやすいよう、「6個のサイコロを同時に投げるとき、A：1種類のゾロ目が出る確率、B：1～6の目が一つずつ出る確率のどちらが高いか」を比較する設定であった。また、サイコロの数を少しずつ増やしながら考えるよう糸口を提示し、生徒がそれぞれの進捗で学習を進められるように支援していた。これらは、「個別最適な学び」につながる工夫である。実験はグループで行うことを基本としており、「協働的な学び」を意識していた。さらに、生徒にはサイコロを用いることにこだわらず、自らのやり方を見つけて取り組めるよう指示をしていた。

生徒アンケートの回答（表9）では、考えが深まった場面として、サイコロを用いたり、計算したりして試行錯誤したことが挙げられていた（図6）。グループ学習を基本とした授業であったが、個人で考えていた場面を考えが深まった場面として挙げる回答も見られた。これらから、自分に合った学習方法に気付くこと等も期待され、「個別最適な学び」の中で、生徒が自らの学習を調整する力が育成されたことが推測される。また、グループの話合いや、グループの他者の考え方を参考にした回答もあり、「協働的な学び」を通じて、学びが深まった姿も見られた。

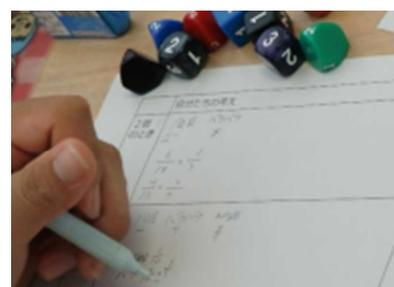


図6 計算で考える様子

表9 9月数学科研究授業の生徒アンケートの回答（抜粋）

1. 授業に取り組んで、考えが深まったと感じた場面を記入してください。
<ul style="list-style-type: none"> ・グループの人と確率をどのような計算で求めるか考えた場面。 ・二つの数字のサイコロを回す場面。 ・先生が解説してくれたこと。 ・学習を進めて行くにつれて。 ・自分なりに深く考えているとき。 ・サイコロのゲームが面白いと感じたとき。 ・グループの人と、どのような計算で求めるか考えたとき。
2. なぜ考えが深まったと感じることができたのか。その理由を記入してください。
<ul style="list-style-type: none"> ・自分の予想と異なったから。 ・グループで違う意見が出て納得したから。 ・目の和を求めるとき、積の法則を使うと求めやすくなると知ったから。 ・グループの人たちと実際にサイコロをまわし、自分達なりに確率について考えることができたから。 ・自分なりに考えていき、少し苦労したが解けたから。 ・グループの人の計算を見て、どのように求めていったらよいか考えることができたから。

(ウ) 地歴公民科の研究授業（地理総合）

生徒がベトナムの食文化とその背景を調べ、観光リーフレットを作成し発表する授業であった。授業の目標は、「ベトナムの食文化が形成された背景について調査し、調査結果に基づき、多面的・多角的に考察した結果を、論拠を挙げながら自分の言葉で分かりやすく表現する。」で、思考力、判断力、表現力等の育成が意識されていた。授業のポイントとして、ベトナムの食文化から、自分の興味・関心に応じて調べるものを決定できるようにすること、教科書とインターネット等、調べる際に使用するものを自分で選択できるようにすることなど、「個別最適な学び」を意識した工夫があった。また、エキスパート活動で、相互の良い部分を学び合ったり、不足している情報を教え合ったりできるようにしたことや、ジグソー活動で、異なる視点から同一の課題について考察できるようにし、多面的・多角的な考察を協働して行えるようにしたことが「協働的な学び」を意識した工夫である。さらに、授業では、発表の際、他グループの発表に対してリアクションするなどの工夫も取り入れられていた。

生徒アンケートの回答（表10）から、生徒がそれぞれの視点で学びの成果を得た姿が見られ、授業を通じて視野が広がったり、気づきを得たりした様子が見えられた。自分たちで調べたことで実感が沸いたことや、初めに思っていたことから、考えが変遷し、他者と自分の意見が自分の中で統合されたこと等の回答から、生徒の学びが深まったことだけではなく、自分の理解の仕方などの学び方に気づきがあったことが推測される。これは、「個別最適な学び」の表れと言える。また、他者の視点から学びが深まったという回答が多く見られ、「協働的な学び」が効果的に行われていたことが推測される。

表10 9月地歴公民科研究授業の生徒アンケートの回答（抜粋）

1. 授業に取り組んで、考えが深まったと感じた場面を記入してください。
・三つの食べ物の作り方や材料等が、ヨーロッパ諸国の植民地支配に影響されていることがわかったとき。 ・ベトナムの食文化を知ったとき。 ・ベトナムの食文化についての学べたこと自体。 ・グループで他の人の意見を聞いたとき。 ・同じことを調べた人同士で情報共有をしたとき。 ・段階を踏んで調べたことが実を結んだとき。 ・ベトナムの食文化が何に影響を受けているか考えたとき。
2. なぜ考えが深まったと感じることができたのか。その理由を記入してください。
・食文化を通して気候的に何がよいかなどを考えることができ、面白いと感じたから。 ・実際に自分たちで調べることで、その国の食べ物が、地理的、歴史的な影響を受けていると理解できたから。 ・自分のグループの考えと異なる根拠に気付かされたから。 ・グループワークで色々な人の意見を聞いたから。 ・歴史が1番影響を受けていると考えたが、授業を通し、歴史、環境、社会の仕組み全てどれかが欠けていたら、今伝えられているものが無かったんだな、と思った。 ・自分と違った考えを聞くことによって新たな視点を見つけることができたから。 ・自分が調べきれなかったことや知らなかったことを、情報として取り入れることができたから。

ウ 9月意見交換会とフィードバック

9月の意見交換会では、授業の振り返りと次の研究授業への展望について話し合った。商業科の授業者は、研究授業について、問いに対してグループで一つの成果物を協働で作成する展開を取り入れるべきであったと、さらなる授業改善の視点を得ていた。また、学習の苦手な生徒が、自分なりの理解を見だし発言できていたことに研究授業の成果を感じていた。数学科の授業者は、生徒の学習状況を見ながら個別学習

と協働学習の時間を明確に分けることなく授業をしたことで、結果的に生徒は「個別最適な学び」を行えていたとの感想を述べた。これは、自由度の高い授業が、多様な生徒の学びを引き出したと考えられる。また、生徒の学ぶ姿勢に手応えを感じるとともに、意外な生徒の学びの深まりやひらめきに成果を感じていた。地歴公民科の授業者は、エキスパート活動の中で、生徒が互いに補完し合いながら学習を進める姿や、東南アジアの知識と教科書の内容をつなげながら理解を深める姿に成果を感じていた。

今後について、商業科の授業者は、簿記の処理の仕方についてなぜこうなるのかを考えさせる授業展開をしていきたいとの抱負を述べた。数学科の授業者は、今回の授業に手応えを感じ、生徒が複数の課題から選択し学んだことを、全体で共有しながら新たな問いや気づきを得ていく授業展開をしていきたい、また、生徒に任せる時間を確保したいと抱負を述べた。地歴公民科の授業者は、生徒の考えが深まる場面でのICT活用を試みたいとの抱負を述べた。

授業者へのフィードバックも行った。センターからは生徒アンケートの回答を基に、「個別最適な学び」の表れと「協働的な学び」の表れが見られた学習活動について伝えた。河崎准教授からは、授業設計診断の4項目の視点から分析があり、各学習活動の意義を再度明らかにする必要性などについて指摘があった。また、11月の研究授業につながるよう、授業者のねらいをより明確にするようなセンターの支援の必要性についても指摘があった。

研究協力校のその他の教員にも、これらの内容を資料にまとめ伝えた。

エ 11月研究授業

(7) 商業科の研究授業（簿記）

減価償却の仕組みを取り扱う授業であった。「固定資産の残存価額に着目をし、減価償却費の計算方法と決算整理仕訳を導き出す。」ことを目標とし、知識及び技術の習得を意識した。計算式を覚えさせる暗記型の解き方指導になってしまいがちな分野の学習であるが、言葉や金額の意味を一つずつ丁寧に理解することが重要だと考え、授業設計を行った。「協働的な学び」の学習効果を期待し、グループ学習を中心に進めつつも、教員が個別に生徒の支援がしやすいよう、「個別最適な学び」を意識してグループの構成を工夫した。また、問いに対して個人で考えてから、グループで対話することをセットにして行い、個人のつまずきを「協働的な学び」を通して解決できるようにすることもねらっていた。

生徒アンケート（表11）から、「協働的な学び」を通じた学びの深まりについて、多くの回答が見られた。また、ICTの活用を通して視覚的に捉えることが自分の学びに効果があることに気付くなど、「個別最適な学び」の姿も見られた。

授業者が投げ掛けた「減価償却を1年で処理するとどうなるか」という問いについて、生徒が今までの学びと結び付けながら、自由に考えを述べる中で、減価償却について理解を深めた姿も見られた。学習の積み重ねと結び付けながら、生徒が自由に考えられる問いが、学びを深める上で非常に重要であることが改めて認識された。

表11 11月商業科研究授業の生徒アンケートの回答（抜粋）

1. 授業に取り組んで、考えが深まったと感じた場面を記入してください。
<ul style="list-style-type: none"> ・表計算処理ソフトを活用してグラフを用いたとき。 ・減価償却について考えたこと自体。 ・減価償却期間が10年の場合と1年の場合を考えたとき。 ・グループのみんなで話し合っって答えを見つけ出したとき。 ・グループ活動で自分では気付けなかったことに気付けたこと。
2. なぜ考えが深まったと感じることができたのか。その理由を記入してください。
<ul style="list-style-type: none"> ・知らなかったことを知ることができたから。 ・最初はわからなくてできなかったところができるようになったから。 ・表計算処理ソフトを使ったり、グループ活動を行ったりしたことでよりわかりやすく、理解することができたから。 ・1年で減価償却すると、赤字になり破産するということがわかったから。 ・たくさんの意見が出ることでどれが答えなのかそんな考え方があるのかとか感じることで深まっていったと感じたから。 ・みんなの意見を共有できたり、わからないところを教えてもらったりしたから。 ・グループの色々な意見が聞けたから。

(イ) 数学科の研究授業（数学A）

内心、外心、重心について学んだ後、三角形の部屋における効果的な照明の位置を考える授業であった。授業の目標は「内心、外心、重心の特徴を踏まえながら、様々な三角形の部屋に、適切な照明の位置を考えて表現できる」である。授業のポイントとして、本時では個別学習の中で生徒の多様な学習成果をねらい、次時は、本時の学びを共有し、協働的に学ぶ中で、三角形の角度と内心・外心・重心の関係性についての気付きを期待する展開を考えた。このため、本時は条件次第で最適解が変わるといった数学では扱う機会が少ない題材を扱い、「個人の意見を尊重する雰囲気をつくること」や「意見交換を経て多様な考え方を引き出すこと」を意識させた。また、生徒それぞれが試行錯誤する中で考えが深まり、多様な考え方が生じるよう、選択肢の三角形を豊富に用意する工夫と、作図の作業におけるICT (GeoGebra⁶)を活用する工夫を行った（図7）。

生徒のアンケート（表12）から、生徒がそれぞれの注目点を大切にしながら学習を進めていく姿が見られた。また、粘り強く考えたり、ICTの活用の効果を実感したりするなど、それぞれの学びの自己調整に関する気付きがあり、「個別最適な学び」の表れが見られた。

数学の知識と日常生活をつなげる点でも、生徒の興味関心をひく授業であった。また、単元全体で、

「個別最適な学び」と「協働的な学び」を一体的に充実させた事例でもあった。

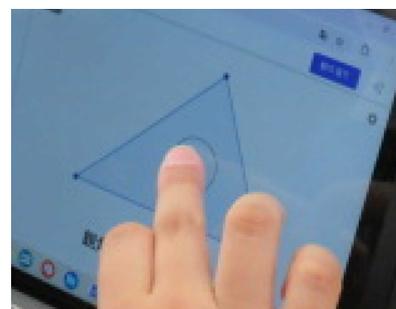


図7 GeoGebraで作図している様子

表12 11月数学科研究授業の生徒アンケートの回答（抜粋）

1. 授業に取り組んで、考えが深まったと感じた場面を記入してください。
<ul style="list-style-type: none"> ・生活の中で数学で学んだことが使われていることを知ったとき。 ・GeoGebraを使ってまとめようとした場面。 ・学んだ知識を活用しているとき。 ・今回は詳しくはやらなかったけど実際にはもっと考えることが多いのではと思ったとき。 ・部屋の角までどうやって光を行き届かせればいいのか考えたとき。 ・どのような位置に照明をつければより節約して明るくできるかを考えたとき。
2. なぜ考えが深まったと感じることができたのか。その理由を記入してください。
<ul style="list-style-type: none"> ・学んだことをヒントに自分で考え解くことができたから。 ・内心や外心などいろいろな考え方を使って理解を深めることができたから。 ・GeoGebraなどを使っているのがわかりやすいから。

⁶ GeoGebra は、幾何、代数、数式処理などに用いられるアプリである。

-
- ・たくさんある問題点や改善点はよく言えばたくさんある伸びしろと感じ、今の現状について考えが深まったから。
 - ・自分の地域を普段気にすることがないので、改めていろいろなことに気付けたから。
 - ・年齢の違いを意識し様々な観点から見てみると、自分の視点では気付かない問題があるとわかったから。
 - ・自分ひとりでは一度に考えられることに限度があり、そこに気付けなかったところもグループの人の意見で気がつくことができたから。
-

オ 11月意見交換会とフィードバック

11月の研究授業後に行われた意見交換会では、授業の振り返りと研究を通じて気付いたことについて話し合った。商業科の授業者は、個別学習と協働学習を往還させる中で、「個別最適な学び」と「協働的な学び」が起こることをねらっていた。問いに対して、個人の学習が止まってしまうことが多く、期待した生徒同士で助け合う姿もあまり見られなかった。個別学習が手詰まりになるタイミングで、いくつかのヒントを用意しておけばよかったと改善案を述べた。数学科の授業者は、個別学習を中心とした授業展開の中で、「個別最適な学び」が起こることをねらっていた。想定通りに個別学習が行われていたが、自発的に「協働的な学び」が起こってもよかったと感想を述べた。地歴公民科の授業者は、生徒が課題を持ちながら探究的に学ぶ授業展開の中で、「個別最適な学び」と「協働的な学び」が起こることをねらっており、生徒の活動から概ね通りであったと手応えを述べた。また、3人の授業者から、生徒は自分なりの学習を行っていたり主体的に学習に取り組んでいたりするなどの、生徒の学ぶ姿勢への変化について、肯定的な発言があった。

全体を通した振り返りでも、それぞれの授業者から貴重な意見が挙げられた。商業科の授業者は、生徒が知識及び技能（技術）を習得してから、思考力、判断力、表現力等を働かせる授業のみならず、生徒が思考力、判断力、表現力等を働かせる中で、知識及び技能（技術）を習得する授業展開が可能である⁷と感じた。このようなことから、簿記の研究授業では、処理の仕方を覚えるのではなく、考えながらその仕組みなどを理解して、技術として身に付けることを重視していた。さらに、商業の授業者は、このような学習過程では、生徒それぞれの考え方や学習の習得状況が異なるため、生徒それぞれが仕組みの理解ができるよう、「個別最適な学び」の視点が重要であることに気付いた。数学科の授業者は、「個別最適な学び」を成立させるために、生徒の関心をひきつけられるような授業展開の工夫が必要であると考えた。このため、2回の研究授業ではともに、生徒が考えたいくなるよう、比較や日常生活との関わりを取り入れるなど問いを工夫した。また、「個別最適な学び」により生徒の意見や考え方などが多様になると、「協働的な学び」が深まるのではないかと考えた。このため、2回目の研究授業では、「協働的な学び」の材料となるように、前時の「個別最適な学び」が充実するような授業展開の工夫を考えた。地歴公民科の授業者は、「個別最適な学び」により生徒は学びを自分事にしていくため、「個別最適な学び」が「主体的な学び」に深く関わること、地歴公民科の授業においては、「協働的な学び」で多様な視点からの学び合

⁷ 高等学校学習指導要領（平成30年告示）解説総則編で、第3章 第1節 「3 育成を目指す資質・能力」の「②思考力、判断力、表現力等を育成すること」に、「『思考力、判断力、表現力等』を発揮することを通して、深い理解を伴う知識が習得され、それにより更に思考力、判断力、表現力等も高まるという相互の関係にあるものである。」とあり、知識及び技能（技術）と思考力、判断力、表現力等の関係性が示されている。

いができるよう、多面的・多角的な考えが期待されるよう工夫した「個別最適な学び」を行う重要性に気付いた。このため、2回目の研究授業では、授業者が四つの視点を準備するなどの工夫をしていた。

授業者へのフィードバックも行った。センターからは、生徒アンケートの回答を基に、「個別最適な学び」と「協働的な学び」が見られた学習活動について伝えた。河崎准教授からは、9月と同様に授業設計診断の4項目の視点からの分析に加え、「個別最適な学び」と「協働的な学び」の視点での授業改善に向けた指摘があった。特に、「個別最適な学び」を意識した生徒が学習課題や材料を選択する学習活動が、意味のあるものになるよう、生徒が根拠をもって選択できるようにする重要性が指摘された。

研究協力校のその他の教員にも、これらをまとめた資料を伝えた。

カ 質問紙調査

7月と12月の結果を比較したところ、有意差が認められた質問項目はなかった。

12月の質問紙調査の項目間の関係性（表14、質問内容は表15）は、令和5年度と同様の相関関係（質問5と質問12～15の）に加え、新たに質問4と質問5、質問5と質問6に

表 14 12月質問紙調査の分析 (n=25)

について	質問4	質問6	質問10	質問12	質問13	質問14	質問15
中程度以	質問4	—	0.389**	0.627**	0.686**	0.448**	0.482**
上の相関	質問5	0.703**	0.663**	0.743**	0.663**	0.504**	0.725**

が見られた。質問4～6は、生徒の「個別最適な学び」の表れを示したものである。これらの相関が高いことは、表15に示された「個別最適な学び」の様々な生徒の姿が、一体的に表れるものであることを意味している。同様に、令和6年度では、質問5と質問10についても中程度以上の相関が見られた。質問10については、生徒の「協働的な学び」の表れを示している。このことから、「個別最適な学び」と「協働的な学び」は一体的に表れるものとして、これらの関係性が示されたと思われる。前述の数学の授業者の気づきと合わせると、生徒が仮説を立て、見通しを持って学習することで、「個別最適な学び」を通じて生徒それぞれが自分の意見を深めることができ、その後の「協働的な学び」の中で、他者の意見を基にさらに考えを深めることにつながると考えられる。

表15 相関関係の見られた質問内容

質問4	児童生徒が、それぞれの興味・関心に応じた課題（問い）を設定している。
質問5	生徒が、仮説を立て、見通しをもって学習している。
質問6	児童生徒が、課題（問い）に対して、学習方法を選択、判断、工夫しながら解決しようとしている。
質問10	児童生徒が、他者の意見をもとに自らの考えを深めている。
質問12	授業設計において、児童生徒が解決したくなるような課題（問い）を設定している。
質問13	授業設計において、他者との対話が必要な課題（問い）を設定している。
質問14	授業設計において、複数の視点や立場から考え、比較、統合することで解決策や答えにつながるよう、考えるための材料（資料等）を工夫している。
質問15	授業設計において、教科・科目の「見方・考え方」を働かせて、児童生徒が思考できるように工夫している。

6件法（質問への肯定的な回答を6、否定的な回答を1）で得た12月のアンケート結果について平均値を算出したところ、質問8、9、17の数値が低かった（表16）。質問8と9は、生徒の「協働的な学び」についての質問で、質問17については、カリキュラム・マネジメントについての質問であり、いずれも他校や地域との連携に関するも

のもである。研究協力校は地域連携を重視しているため、今後これらの質問内容を取り入れた授業を行うことで、学校の教育活動の更なる充実につながると感じる。

表16 数値の低かった質問内容

質問8	児童生徒が、課題（問い）の解決に向けて、異学年、他校の児童生徒と関わって学習している。
質問9	児童生徒が、課題（問い）の解決に向けて、地域の方々、専門家等と関わって学習している。
質問17	地域の方々や他校種の教員と、授業改善に向けた交流を行っている。

質問27と質問28については、表17に示すようなコメントが見られた。質問27からは、「個別最適な学び」と「協働的な学び」の視点から、自身の授業改善を試みている姿がうかがえた。また、質問28からは、生徒が主体的に学習に取り組む姿や、「協働的な学び」を通じて学びを深めている姿がうかがえた。

表17 質問紙調査の回答（抜粋）

質問27	「個別最適な学び」と「協働的な学び」を意識した授業づくりを通じて、御自身の授業について変化や気付いたことがあれば記入してください。
	<ul style="list-style-type: none"> ・生徒の時間の大切さ。 ・知識習得ではなく、活用を意識するようになった。 ・どのようなことを共有したいかを考えるようになった。 ・共有の時間を積極的に設けるようにした。 ・スモールステップを意識して変化を目指している。 ・生徒の現状を把握できるようになった。 ・生徒が考えたり調べたりする作業に集中出来るよう、時間に余裕を持たせるようにした。 ・生徒の主体性を引き出すことを意識して授業を設計するようになった。 ・協働学習は必要である。
質問28	「個別最適な学び」と「協働的な学び」を意識した授業を通じて、生徒の変化について気付いたことがあれば記入してください。
	<ul style="list-style-type: none"> ・生徒は積極的に対話する集団が多いと感じた。 ・生徒の主体性が高まったように感じられた。 ・生徒同士で教え合ったり、情報共有する場面が多くなったりして、理解度も高まったように感じられる。 ・個人の作業は長めにした方がより集中して取り組んでいる。 ・協働的な活動では他者の見方や意見交換ができるため活発に活動する生徒が増える。 ・他者の意見を聴くことにより、違う視点から物事を観る習慣や考え方が出来るようになってきた。

(3) 分析と考察

ア 個別最適な学びと協働的な学びのポイント

まず、「個別最適な学び」について整理する。

9月の商業科と数学科の研究授業において、生徒が多様な手段で学べるよう、授業者は手段や材料をいくつか用意して提示した。これにより、生徒は様々なアプローチから考えることができ、自らの学習手段について気付きを得ることが期待された。これは、「個別最適な学び」の表れである。このことから、「個別最適な学び」のポイントの一つに、生徒が自分で「選ぶ」、「決める」ことができるように、教員が多様な学びが生じるための手段や材料を用意することがあると考えた。なお、この児童生徒が自身で選択や決定を行うことは、信州大学の伏木久始教授は自律的な学びの必須条件⁸として、「個別最適な学び」につながるものとして重視している。

「個別最適な学び」が充実する上で、9月と11月の数学科や地歴公民科の研究授業のように、生徒が考えを広げたり深めたりするために、様々な試行錯誤が行えるような自由度の高い授業設計もポイントとなる。自由度を高めることで、さらに生徒が「選ぶ」、「決める」場面や自分で判断し学習調整をしてみる場面が増えることが期待されるため、この研究授業のように学びを生徒に委ねる機会が増え、「個別最適な学び」が充実することが考えられる。この自由度を高める際には、授業設計診断の4項目における、「解

⁸ 『「個別最適な学び」と『協働的な学び』の一体的な充実を目指して』の「第4章 互恵的に深化・発展する個別最適な学びと協働的な学び」より。

決したい課題や問い」や「考えるための材料」をどのように準備するかが重要となる。さらに、「解決したい課題や問い」と「考えるための材料」については、生徒が様々な工夫しながら、個別最適に学びたくなるよう、生徒の興味関心を高める役割もある。例えば、数学で見られたような、サイコロを用いた二つの事象が起こる確率を比較させたり、学んだことを基に快適な日常生活を考えさせたり、地歴公民科の観光パンフレットを作成したりといった設定などの工夫がそれに当たる。この興味関心を高める工夫も、「個別最適な学び」を充実させる上でポイントの一つといえる。

11月の地歴公民科の研究授業のように、各教科で行う探究的な学びの授業は、「個別最適な学び」が生じやすく、その効果を生徒も実感しやすいと考える。「個別最適な学び」のため、生徒に学びを委ねる上で、学びの手段や材料の準備、学びへの動機付けなど、教員が工夫できることは多い。

また、本研究で行った研究授業のアンケートのように、授業の最後のタイミングなどでそこまでの学びを生徒が振り返るなどして、自身の学び方に気付かせることも、「個別最適な学び」が起こるための重要なポイントとなる。

しかし、「個別最適な学び」において、自由度の高い授業を設計し、学習を生徒に委ねることが重要であるとしたが、ただ生徒に委ねても必ず「個別最適な学び」が生じるとは限らない。例えば、教員が「自分で課題を考えなさい。」や「自分でやり方を考えなさい。」等の指示をしても、そういった学習経験を十分に積んでいない生徒にとって、何をしたらよいか分からなくなり、学習が進まなくなることが想定される。このような場合は、商業科や数学科の研究授業のように、教員が生徒に多様な学びが生じるための手段や材料を用意することが重要となる。しかし、最終的に生徒が自立して学習できるようにしていくことが「個別最適な学び」の中で求められていることであるため、いつまでも教員が準備するのではなく、生徒に委ねる部分を広げていくことは大切である。

「個別最適な学び」におけるICT活用は、商業科の9月の研究授業や数学科の11月の研究授業で見られたように、試行錯誤の過程での活用が効果的である。また、地歴公民科の11月の研究授業で見られたように、情報を収集する場面でのICT活用でも、それぞれの興味関心に応じて調べることで新たな疑問が生じるなどの効果が見られた。また、生徒アンケートの回答に、学びが深まった場面として1人1台端末の活用が挙げられていた。児童生徒がICTを活用することで理解しやすくなったり、考えが深まったりする経験をする中で、その有用性に気付くきっかけとなり、自分にふさわしい学習方法としてICT活用を位置付けることも期待できる。

「協働的な学び」については、全ての研究授業における協働学習の場面で見られた。生徒それぞれが考え方や意見を持ち、集団の中に多様な考え方や意見などがある状況で協働学習が行われることが、「協働的な学び」のポイントとなる。そのためには、授業設計診断の4項目における「解決したい課題や問い」、「考えるための材料」、「対話と思考」を工夫することに加え、協働学習の前に「個別最適な学び」を充実させることも有効であると考えられる。

「協働的な学び」におけるICT活用は、グループで意見をまとめる際の共同編集機能や、発表の際の情報共有機能などの活用があり、生徒が新たな気づきを得やすくなるなどの効果が見られた。

イ 個別最適な学びと協働的な学びの学習効果

研究授業の授業者は、「個別最適な学び」と「協働的な学び」を意識した授業を行うことで、生徒の授業に取り組む姿勢が良くなることを実感していた。これは、「個別最適な学び」と「協働的な学び」により期待される学習効果を表している。また、地歴公民科の授業者は、生徒が「選ぶ」、「決める」過程は、学びを自分事にすることや学びへの責任感などを生むことについて述べていた。これは、「個別最適な学び」により期待される学習効果を表すと同時に、「個別最適な学び」が主体的な学びにつながる可能性を示唆している。

また、「思考力、判断力、表現力等」を發揮して生徒が学び、「知識及び技能（技術）」を身に付ける授業において、個々の生徒の学習状況に応じた手段などで学ぶ必要があるなどの授業者の気付きは、「個別最適な学び」の教育効果が生徒の資質・能力の育成にもつながることを示唆している。このことは、授業を実践する授業者ならではの気付きであり、非常に大きな示唆であると考ええる。

ウ 個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実

多くの研究授業では、「個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実」と「主体的・対話的で深い学び」がともに見られた。

まず、「個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実」について考察したい。

前述の通り、「個別最適な学び」は「協働的な学び」の材料となりうることを示唆された。また、生徒アンケートの回答から、他者の学び方や考え方を参照するなどし、自分なりの理解の仕方や学び方を見いだすなど、「協働的な学び」の中で「個別最適な学び」が促される様子が見られた。さらに、生徒アンケートの回答では、自分の学びを深める場面に「協働的な学び」を上げるものが多くあり、「協働的な学び」そのものを自身にとって最適な学び方として捉える姿も見られた。このように「個別最適な学び」と「協働的な学び」は相互に影響し合い生徒の学びを深めることが期待される。このために、「個別最適な学び」と「協働的な学び」が往還するよう意識して授業や単元を計画することで、「個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実」が達成されると考える。なお、これは、個別学習の後で協働学習を行うという形式的なものではない。例えば、調べて発表して終わりとならないよう、学びが最終的に児童生徒それぞれのものになるよう意識する必要がある。また、11月の地理総合の研究授業では、生徒が自由に学ぶ中で、「個別最適な学び」と「協働的な学び」がそれぞれの生徒ごとに行われており、探究的な学びにおいて、特に「個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実」が起こりやすいと感じた。

次に、「個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実」と「主体的・対話的で深い学び」のつながりについて考察したい。

前述の通り、「個別最適な学び」により、生徒に主体的な学びが期待される可能性が示唆された。また、生徒アンケートの結果から、「協働的な学び」においては、生徒が対話により学びを深めることが示されている。以上のことを考えると、「個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実」が、「主体的・対話的で深い学び」につながるものと考えられる。これは、p.6の図1で示した「個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実」と「主体的・対話的で深い学び」の関係性を表していると考ええる。

エ 質問紙調査

令和6年度の質問紙調査の前後比較では、変化している項目がなかった。その一方、令和5年度に見られなかった「個別最適な学び」に関する質問間の関係性や「個別最適な学び」に関する質問と「協働的な学び」に関する質問の関係性などが令和6年度に見られるようになったことは、研究を通して研究協力校で「個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実」の理解が深まったことで生じた変化とも考えられる。

令和6年度の反省点としては、研究授業の成果を研究協力校の全ての教員へ十分に還元できていなかったことがある。研究協力校でさらに「個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実」の理解を深め、研究協力校の授業改善の支援につなげていきたい。

IV 研究のまとめ

1 研究の成果と課題

本研究の成果について、目標として定めた①～⑤について、次のようにまとめる。

① 資質・能力の育成につながる、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善と、「個別最適な学び」と「協働的な学び」及びICT活用の関係性

文献等を調査し、「個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実」とは、学習指導要領を踏まえた学習活動について、その方向性を捉え直し充実させるための観点であることを見いだした。ICT活用については、「個別最適な学び」と「協働的な学び」の視点で捉えることを提案した。

また、「個別最適な学び」と「協働的な学び」について、教員がどのようなことを意識するのか、その手立てをポイントとして整理した。

これらは、R4リーフレットとしてまとめ、センターのwebサイトへの掲載やセンターにおける研修等を通じて、情報提供を行った。

② 「個別最適な学び」に向けた授業の工夫やICT活用と、それによる児童生徒の学びへの効果について、知見を蓄積する。

「個別最適な学び」に向けた授業の工夫については、学習課題や学習手法などを児童生徒が自分で「選ぶ」、「決める」ことができることが大きなポイントで、児童生徒の状況に応じてこれを教員が提示することが大切である。また、授業設計診断の4項目における、「解決したい課題や問い」や「考えるための材料」等を工夫し、児童生徒の興味・関心をひくことで「個別最適な学び」が充実することも考えられる。さらに、児童生徒がそれぞれに応じた学習ができる自由度の高い授業設計や、児童生徒が「個別最適な学び」の効果に気付くための振り返りも重要である。

ICT活用については、ICTの情報蓄積機能の活用事例が確認できた。これにより、児童生徒は試行錯誤や振り返りが行いやすくなり、「個別最適な学び」が充実する。また、ICTの活用が自分の学びを深める経験をすることで、自分にふさわしい学習方法としてICT活用を位置付ける可能性も示唆された。

児童生徒への効果については、学びを自分事にして主体的に取り組めるようになり、粘り強く取り組めるようになりやすくなる姿を確認することができた。

③ 「協働的な学び」に向けた授業の工夫やICT活用と、それによる児童生徒の学びへの効

果について、知見を蓄積する。

「協働的な学び」に向けた授業の工夫については、「協働的な学び」を行う前に児童生徒の考え方などが多様であることが大きなポイントとなる。この多様性を生み出す一つの手段として、「個別最適な学び」が活用できる可能性が示されると共に、「解決したい課題や問い」や「考えるための材料」の工夫も重要であることが考えられる。

ICT活用については、ICTの情報共有機能の活用や共同編集機能の活用により、「協働的な学び」が充実することが確認できた。

児童生徒への効果については、「協働的な学び」の中で、考え方を修正したり、視点を広げたりして、学びが深まったり広がったりすることが確認できた。また、他者との協働や承認などを経て、自己肯定感の高まりも期待できることが見いだされた。

④「個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実」について、「個別最適な学び」と「協働的な学び」の関係性を整理し、一体的に充実するための工夫などについて知見を蓄積する。

「個別最適な学び」と「協働的な学び」の関係性については、「個別最適な学び」が「協働的な学び」の材料として学びを深めることが示唆された。このため、このような意図で工夫した「個別最適な学び」と「協働的な学び」を一体的に行う授業設計は、「個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実」につながる一つの手段と考えられる。また、探究的な授業が「個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実」につながる工夫であることも見いだされた。

その一方で、「個別最適な学び」と「協働的な学び」の関係性については、「協働的な学び」の中で、児童生徒が新たな課題を発見するなどの「個別最適な学び」の姿があり、「個別最適な学び」を意識した授業の中で、児童生徒が自発的に「協働的な学び」を行うなど、「個別最適な学び」と「協働的な学び」は場面として切り分けることは難しい場合があることも研究を通じて認識したことである。探究的な授業で「個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実」が見られたことも、このことを示していると考えられる。

⑤「個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実」を意識した授業による、児童生徒の資質・能力の育成につながる「主体的・対話的で深い学び」を目指した授業改善への効果について、知見を蓄積する。

まず、「個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実」と「主体的・対話的で深い学び」についてまとめる。「個別最適な学び」を意識した授業により、学びが自分事になるなど、児童生徒の「主体的な学び」とつながることが提起された。また「協働的な学び」は「対話的な学び」とつながり、「個別最適な学び」と「協働的な学び」を通して、児童生徒の学びは深まるため、「個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実」が「主体的・対話的で深い学び」の実現につながると考えられる。参考資料で示されたように、「個別最適な学び」と「協働的な学び」は、学習指導要領の趣旨を踏まえた、学習活動の充実の方向性を捉え直す観点であることが改めて確認できた。

「個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実」と児童生徒の資質・能力の育成については、研究の中で、児童生徒がそれぞれの特性や学習状況に合わせて思考力、判断力、表現力等を発揮しながら学び、同じ知識及び技能（技術）を習得できるよう、

「個別最適な学び」の視点で授業設計をする重要性が示唆されたことで、この関係性を見いだすことができた。

また、研究をまとめた各年度のリーフレットも研究の成果である。

今後の課題としては、次の2点が挙げられる。

1点目は、研究成果の県内学校への還元である。作成したリーフレットを活用して研修を行うなどし、研究で得られたことを還元していきたい。その際、本研究の研究授業の授業者が「個別最適な学び」と「協働的な学び」の理解が深まったポイントである、他校種での事例紹介や意見交換などの機会を設けることも有効であると考えられる。

2点目は、事例収集である。特に「個別最適な学び」と「協働的な学び」の視点でのICT活用の事例の充実が求められていると感じる。今後もこの視点での事例を収集し、県内の授業改善に役立てていきたい。

2 今後の展望

令和6年12月に次期学習指導要領の改訂に向けた検討が、文部科学大臣より中央教育審議会に諮問された（「初等中等教育における教育課程の基準等の在り方について」）。この中で、次期学習指導要領に向けて、子どもが学ぶ意義を十分に見いだせず、主体的に学びに向かうことができていることに注目し、背景や特性が異なる児童生徒一人一人への支援の在り方や、多様性を包摂し、一人一人の意欲を高め、可能性を開花させる教育の実現を喫緊の課題としている。また、学習指導要領における重要な理念の関係性の整理の中で、「主体的・対話的で深い学び」や「個に応じた指導」、「個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実」との関係をどのように考えるかや、興味・関心や能力・特性に応じて子どもが学びを自己調整し、教材や方法を選択できる指導計画や学習環境のデザインについてをどのように考えるかについて指摘がある。

また、令和6年7月に示された「令和6年度全国学力・学習状況調査の結果（概要）」では、「個別最適な学び・協働的な学びの両方に取り組んだと考えている児童生徒は、正答率が高い傾向が見られるとともに、『授業の内容はよく分かる』『学校に行くのは楽しい』『自分には良いところがあると思う』と回答している傾向が見られる。」と記されている。これらは、「個別最適な学び」と「協働的な学び」の教育効果を示しているものと考えられる。

これらのことから、今後も「個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実」は重要視されることが考えられる。本研究は本年度で終わりであるが、静岡県総合教育センターは、「個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実」の理解が広がることを意識し、これからも研修に努めていく。

【主な参考文献】（著者名50音順）

- 国立教育政策研究所 『令和6年度全国学力・学習状況調査の報告書・集計結果について』（2024）
- 中央教育審議会 『令和の日本型学校教育の構築を目指して～全ての子ども達の可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～』（2021）
- 中央教育審議会 『初等中等教育における教育課程の基準等の在り方について』（2024）
- 奈須正裕、伏木久始（編著） 『「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実を目指して』 北大路書房（2023）
- 文部科学省生涯学習制作局情報教育課 『ICTを活用した指導方法』（2018）
- 文部科学省初等中等教育局教育課程課 『学習指導要領の趣旨の実現に向けた個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実に関する参考資料』（2021）

【研究組織】

研究顧問 静岡大学教育学部 准教授 河崎 美保

研究担当所員

総合教育センター RPT研究チーム

◆…リーダー

氏名	職名	令和4年度	令和5年度	令和6年度
総括				
山本 真人	専門支援部長	○	○	—
鈴木 泉	専門支援部長	—	—	○
遠山 一郎	総合支援部長	○	○	—
伊藤 直美	総合支援部長	—	—	○
小中学校支援課				
飯田 崇史	教育主査（指導主事）	○	—	—
亀谷 和範	教育主査（指導主事）	—	○	○
高等学校支援課				
中嶋 康文	教育主査（指導主事）	◆	◆	—
市川 雄三	教育主幹（指導主事）	—	○	◆
小粥 美穂	教育主査（指導主事）	—	—	○
山下 高充	教育主査（指導主事）	—	—	○
特別支援課				
渡邊 直樹	教育主査（指導主事）	○	—	—
矢島 渚人	教育主査（指導主事）	—	○	○
北原 健佑	教育主査（指導主事）	—	—	○
研修課				
不二山 馨	教育主査（指導主事）	○	○	—
小川 拓也	教育主査（指導主事）	—	—	○
教育相談課				
村松 義之	教育主査（指導主事）	○	—	—
藤山 裕	教育主査（指導主事）	—	○	○
総務企画・ICT推進課				
菅沼 伸隆	班長（指導主事）	○	—	—
大畑 和也	教育主査（指導主事）	○	○	○
藤井 美奈子	主査	○	○	—
原田 直毅	主査	—	—	○
事務局				
本杉 淳	参事兼小中学校支援課長	—	○	○
大野 達雄	高等学校支援課長	○	—	—
芳岡 遵一	高等学校支援課長	—	○	○

本研究に際して、御指導、御助言いただいた諸先生方、御協力いただいた学校や研究協力員の皆様に心より御礼申し上げます。

別紙 1

質問 1	一人ひとりの児童生徒の特性や学習到達度を把握している。
質問 2	一人ひとりの児童生徒の特性や学習到達度に応じ、指導方法や教材、学習時間の設定等を工夫している。
質問 3	特別な支援が必要な児童生徒に、より重点的な指導を行っている。
質問 4	児童生徒が、それぞれの興味・関心に応じた課題（問い）を設定している。
質問 5	児童生徒が、仮説を立て、見通しをもって学習している。
質問 6	児童生徒が、課題（問い）に対して、学習方法を選択、判断、工夫しながら解決しようとしている。
質問 7	児童生徒が、課題（問い）の解決に向けて、授業集団内の他者と協働している。
質問 8	児童生徒が、課題（問い）の解決に向けて、異学年、他校の児童生徒と関わって学習している。
質問 9	児童生徒が、課題（問い）の解決に向けて、地域の方々、専門家等と関わって学習している。
質問 10	児童生徒が、他者の意見をもとに自らの考えを深めている。
質問 11	自校で育成を目指す児童生徒像を踏まえて授業設計を行っている。
質問 12	授業設計において、児童生徒が解決したくなるような課題（問い）を設定している。
質問 13	授業設計において、他者との対話が必要な課題（問い）を設定している。
質問 14	授業設計において、複数の視点や立場から考え、比較、統合することで解決策や答えにつながるよう、考えるための材料（資料等）を工夫している。
質問 15	授業設計において、教科・科目の「見方・考え方」を働かせて、児童生徒が思考できるように工夫している。
質問 16	児童生徒が、自らの学習を振り返り、自己の成長や新たな課題を見いだす機会を設けている。
質問 17	地域の方々や他校種の教員と、授業改善に向けた交流を行っている。
質問 18	授業で ICT を活用する必要性を感じている。
質問 19	ICT の活用方法や成果を同僚と共有している。
質問 20	授業で児童生徒が ICT を活用する機会を設けている。
質問 23	ICT を児童生徒が活用する場面を想定して単元（題材）の計画を立てている。
質問 24	児童生徒に身に付けさせたい資質・能力を意識して ICT を活用する場面や方法を工夫している。
質問 25	授業における ICT 活用の効果を実感している。